

## 承空筆『小野篁集』による 校訂本文作成の試み

中 村 一 夫

『篁物語』『小野篁集』は主に江戸初期に書写された『篁物語』枅形本（彰考館蔵・甲本）によって読まれてきた。『日本古典文学大系』（岩波書店）に所収のものをはじめ、これまでに公刊された各種の校注本や校本の類も、同本を底本として本文が立てられている。

しかし、2002年に鎌倉時代後期に写されたとされる承空筆『小野篁集』袋綴本（冷泉家時雨亭文庫蔵）が新資料として公開された。江戸初期に写された彰考館蔵甲本・乙本や宮内庁書陵部蔵本と近い本文を有するものの、細部にはなお検討すべき相違点が存在する。承空本についての研究はまだ緒に就いたばかりであり、これの詳細な調査、考察や残されている伝本との相対的な関係性の解明などが急務であることは言うを俟たない。

そこで、この鎌倉期書写の承空本を読むために、これを底本とした校訂本文を作成することとした。本文の質をうかがう伝本間の異同の状況を考慮することは必要であるが、まずは書写年代の古いものを読むべきであり、そのための校訂本文が必須であるとの判断からである。本文を整えるに当たっての方針については、すべて以下の凡例に記した。

### 凡例

- 1 本文は、承空筆『小野篁集』袋綴本（冷泉家時雨亭文庫蔵）を底本として用いた。文意不明の箇所については、『小野篁集』（宮内庁書陵部蔵）、『篁物語』枅形本（彰考館蔵・甲本）、『篁物語』袋綴本（彰考館蔵・乙本）を参照したが、底本の本文を尊重し、手を加えないことを原則とする。
- 2 読みやすさを考えて、底本の片仮名漢字交じりの表記を平仮名漢字交じりに改めた。またエピソードごとにまとめて、それぞれに小見出しを付した。
- 3 本文は、底本をできるだけ忠実に活字化することを期したが、仮名遣いを歴史的仮名遣いに改め、適宜仮名に漢字をあてた。宛字は普通の表記に戻した。字体はすべて通行のものとした。

- 4 送り仮名は現行の基準に従って補った。
- 5 校訂者の理解するところに従って、濁点を施した。
- 6 底本に使用される踊り字は用いず、文字を繰り返して表記した。
- 7 段落に分けて改行し、句読を切り、会話や心話などを鉤括弧で括った。
- 8 原本の表記はルビとして記した。本行とルビを辿ると、承空本の本文となる。  
なお解釈の難しい箇所については、ルビに「ママ」を付し、原文の形を残した。  
今後の課題とする。
- 9 原本になく、校訂本文に追加した箇所はルビに「・」を付した。
- 10 和歌の詠者を〔 〕に括って、歌の冒頭に示した。
- 11 彰考館本や書陵部本と校合して掲げるべきだと判断した異同を稿末にまとめて示した。主にいわゆる自立語の異同を取り上げている。

#### 参考文献

- 財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 承空本私家集 上』(2002 年)  
平林文雄・財団法人水府明德会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字文責・総索引』(2001 年)  
平林文雄「承空本片仮名書本『小野篁集』対校本」(『文学研究』vol.95、2007 年 4 月)  
安部清哉「『篁物語』承空本(『小野篁集』)に関する研究課題」(『人文』7 号、2008 年)

## 小野篁集（冷泉家時雨亭文庫蔵・承空本）

### 第一部

#### 一 篁と女の出会い

親<sup>おや</sup>のいとよくかしづきける人の娘<sup>むすめ</sup>ありけり。女のする才<sup>ざい</sup><sup>1</sup>のかぎりしつくして、  
今は「書<sup>い</sup>読<sup>ま</sup>ません」とて、「博士<sup>はかせ</sup>にはむつかしからん<sup>ことほ</sup><sup>2</sup>人をせん」とて、異腹<sup>ことほ</sup>  
子<sup>こ</sup>のかみ、大学<sup>だいがく</sup>の衆<sup>しう</sup>にてありけり、異腹<sup>ことほ</sup>なれば、うとくて、「あひ見<sup>み</sup>ず」などあ  
りけれど、「知らぬ人<sup>し</sup>よりは」とて、簾<sup>すだれ</sup>越<sup>こ</sup>しに、几帳<sup>きぢょう</sup>立<sup>た</sup>ててぞ読<sup>よ</sup>ませける。

この男<sup>おとこ</sup>、いとをかしきさまを見て、すこし馴<sup>お</sup>れゆくまに、顔<sup>かほ</sup>を見え、物語<sup>ものがたり</sup>  
などもして、文<sup>ふみ</sup>のてう<sup>3</sup>いふ物を取らせたりけるを見れば、角筆<sup>かうひち</sup><sup>4</sup>して歌<sup>うた</sup><sup>5</sup>をなん  
書きたりける。

〔篁〕中<sup>なか</sup>に行く吉野<sup>よしの</sup>の川<sup>かは</sup>はあせななん妹背<sup>いもせ</sup>の山<sup>こ</sup>を越<sup>こ</sup>えて見るべく  
とありければ、「かかりける」と心遣<sup>づか</sup>ひしけれど、「情<sup>なさ</sup>けなくやは」とて、

〔女〕妹背<sup>いもせ</sup>山<sup>か</sup>かげだに見えてやみぬべし吉野<sup>よしの</sup>の川<sup>かは</sup>は濁<sup>にご</sup>れとぞ思<sup>おも</sup>ふ

又、男<sup>おとこ</sup>、

〔篁〕濁<sup>にご</sup>る瀬<sup>せ</sup>はしばしばかりぞ水<sup>みづ</sup>しあらば澄<sup>す</sup>みなんとこそ頼<sup>たの</sup>みわたらめ  
女、

〔女〕淵<sup>ふち</sup>瀬<sup>せ</sup>をばいかに知<sup>し</sup>りてか渡<sup>わた</sup>らんと心を関<sup>せき</sup><sup>6</sup>に人の言<sup>い</sup>ふらむ

男<sup>おとこ</sup>、

〔篁〕身<sup>み</sup>のならん淵<sup>ふち</sup>瀬<sup>せ</sup>も知<sup>し</sup>らず妹背<sup>いもせ</sup>川<sup>か</sup>おりたちぬべき心地<sup>こゝち</sup>のみして  
かく言<sup>い</sup>ふ程<sup>ほど</sup>に、人憎<sup>にく</sup>からぬ世<sup>よ</sup>なれば、いとけふとくなかりけり。

#### 二 師走の月夜、篁の思い

師走<sup>しはす</sup>の十五日<sup>も ち ころ</sup>頃、月<sup>あか</sup>いと明<sup>がたり</sup>きに、物語<sup>ものがたり</sup>しけるを人<sup>み</sup>見て、「誰<sup>たれ</sup>ぞ。あな、すさまじ。  
師走<sup>しはす</sup>の月夜<sup>い</sup>ともあるかなん」と言<sup>い</sup>ひければ、

〔篁〕春<sup>はる</sup>を待つ冬<sup>ふゆ</sup>の限<sup>かぎ</sup>りと思<sup>おも</sup>ふにはかの月<sup>つき</sup>しもぞあはれなりける

返し、

〔人〕年<sup>とし</sup>を経て思<sup>おも</sup>ひも飽<sup>あ</sup>かじこの月<sup>つき</sup>はみそかの人<sup>ひと</sup>やあはれと思<sup>おも</sup>はむ  
かく言<sup>い</sup>ふ程<sup>ほど</sup>に、夜更<sup>よふか</sup>けにければ、「人<sup>ひと</sup>うたて見<sup>み</sup>むもの」とて、入<sup>い</sup>りにけり。男<sup>おとこ</sup>は、  
曹司<sup>さうし</sup>にとみにも入<sup>い</sup>らで、嘯<sup>うそふ</sup>きありきけり。

さて、あしたに、久<sup>ひさ</sup>しう書<sup>ふみ</sup>読<sup>よ</sup>ませざりければ、父主<sup>ちぬし</sup>、「あやしう篁<sup>たかむら</sup>が見<sup>み</sup>えぬかな」  
と言<sup>い</sup>ひて、呼<sup>よ</sup>びにやるに、おどろきて<sup>7</sup>、例<sup>れい</sup>の書<sup>ふみ</sup>かき集<sup>あつ</sup>めて教<sup>をし</sup>へけるまになむ、  
この女<sup>を</sup>のみ心<sup>こゝろ</sup>に入りて、僻事<sup>ひがこと</sup>をのみなむ、しける。かう教<sup>をし</sup>ふる中に、角筆<sup>かうひち</sup><sup>8</sup>して、  
「かやうの物<sup>もの</sup>の書<sup>ふみ</sup><sup>9</sup>は、僻事<sup>ひがこと</sup>つかまつるらむ。この頃<sup>ころ</sup>はもの覚<sup>おぼ</sup>えずや。

〔簗〕君をのみ思ふ心は忘れず契りしことも惑ふ心か  
返し、  
〔女〕博士とはいかが頼まむさとられず<sup>10</sup> もの忘れする人の心を  
又、男、  
〔簗〕読み聞きてよろづの書は忘るとも君一人をば思ひもたらむ  
かくて、この男は、てふくみをぞ常に作りかへりける。

### 三 稻荷詣にて

さて、この女、願ありて、如月の初午に、稻荷に参りけり。供に人多くもあらで、  
大人二人、童二人ぞありける。大人は色々の桂、二人は同じ<sup>11</sup> をなむ着たりける。  
君は、綾の搔練の單襲、唐の薄物の桜色の細長着て、花染の綾の細長折りてぞ  
着たりける。髪はうるはしくて、丈に一尺ばかり余りて、頭つきいと清げなり。  
顔もあやう世人には似ず、めでたうなむありける。男の童三四人、さてはこの  
兄とぞありける。まほ<sup>12</sup> にはあらねど、先立ち遅れて来ける。詣でざまに困じ  
にければ、兄いとほしがりて<sup>13</sup>、「簗にかかり給へ」とて寄りければ、「いで、い  
ないな」と言ひて、道中に居にけり。

さる程に、兵衛佐より<sup>14</sup> の人、容姿清げにて、年二十ばかりなりけるが、詣  
であひて、かへさに、女の道に居たる、「あな苦し。かくてやは出で立ち給へる」。  
もの嫉みして、男申すに、「かもは車<sup>15</sup> 作りて、乗せ奉りて<sup>16</sup>、このわたりなる  
きさきの峯<sup>17</sup> に据ゑ奉らむ。女の事<sup>18</sup> には大王、帝には誰をかと」言ふ程に暮  
れにければ<sup>19</sup>、破籠探して食はせんとするに、この佐をやりすぐす。この男、休  
むやうにて、降りて、

〔兵〕人知れず心紬の神ならば思ふ心をそら知らなむ  
返し、

〔女〕社にもまだきね据ゑず<sup>20</sup> 石神は知ること難し人の心を  
又もおこせけれど、この兄、いそがしく、車に乗せて、率て去ぬ。

この佐、人をつけて、「いづくにか、率て去ぬる」と見せければ、「その家」と  
見てけり。あしたに文あり。「神の教へ給へしかばなむ。さして奉る。かの石神  
の御もとにて、今日あらば」。文を取り入れて見れば、この兄、出で走りて、「父  
主も聞き給ふに。いとの騒がしく。この童はいづくから来たるぞ。いづれのす  
き者の使ぞ」と言ひければ、「御文は奉らせつれど、昨日いませし主の、『いづ  
れの使ぞ』との給を、うちからは翁びたる声にて、『何事ぞ』などの給ひつれば、  
わづらはしきになん、参で来ぬる」と言ひければ、「とうめの童」と言ひて、又  
のあしたに、「昨日の御返。たびたび、いとおぼつかなし。この童の、あとはか  
なくて参で来にしかば。

〔兵〕あとはかもなくやなりにし<sup>21</sup> 浜千鳥おぼつかなみに騒ぐ心<sup>22</sup> か

この兄、大学に出でにけり。樋洗童、取り入れて奉る。文をも取り、「大学の主もぞ見つくる。近からん、人の家に据ゑよ」とて、「昨日も見しかど、いさや。

〔女〕玉鉦の道交ありし君なればあとはかなくなると知らずや」

見て、「ざれたるべき人かな。うたて、まがまがしうもいりたるかな。いかに言はまし」と思ふ。時の大納言の子なりけり。「あとはかななしと、誰も。道にこそ入り給へりしか<sup>23</sup>。

〔兵〕しばしば<sup>24</sup>にあとはかななしと言ふ事も同じ道には又もあひなむ」

また、これを例の童、もて来たり。兄、道にさしあひて、「今、これより」と言ひて、やりてけり。「かくなむ」と言へば、「例の心肝もなき童かな。先に気色あしう言ひけむ人にや取らすべき。この稲荷にて、まならひものしげに思へりし者ぞや。男よりの物ぞや。そもそも、御返り」とりてやりつ。御返りにくしと思ふもののやに、兄、出であひて、「御文奉り給ふ人は、夜べ男に盗まれ給ひにしかば、求めにゆくぞ。もし、この御文給へる人とも知らず。そち率てゆけ<sup>25</sup>」と言ひければ、しりへ答へに答へて、走りにけり。

「さもあらん」と言ひて<sup>26</sup>、文もやらずなりにけり。女、兄の謀りたるとは知らで、「あやしう訪れぬ」と思ふをり。この兄、例のごとあるなり。「道あひ人の、知りも知らぬ人に、文通はし懸想じ給ふ人の御心にこそありけれ。かの人は、御妻にやがてあはせ奉らん。仲人<sup>27</sup>こそよからめ。許され給ひては<sup>28</sup>不用ぞ」など言ひければ、「なでう、目にかつかん。いかに知りてか、ともかうも思はん」。「世を知らざらん人は、さやうにも言はでこそあらめ。見つかずの御ありさまや。心うし。思はずなり」など言へば、妹いとおしうて、「なにか目にちかざらん人を、しひも見給へと思はん」とて、入りにけり。

#### 四 深く心を通わせる篁と女

例の書読みて、「内侍になさん」の心ありて、親は書を教ふるなりけり。文通はしにはしらたれど<sup>29</sup>、この兄、心をまどはして、思ひ出でられけり。男、言ふやう、「かく思ひ出でられ、限りなき心を思ひしらずして、よそなる人を思ひ給へるこそつられ。

〔篁〕目に近く見るかひもなく思へども心をほかにやらばつらしなと言ひければ、「人の御心も知らずや。

〔女〕あはれとは君ばかりをぞ思ふらむやるかたもなき心とを知れ重くあるや<sup>30</sup>」と言ひければ、すこし心ゆきて、（注：「る」見せ消し「な」傍記）

〔篁〕いとどしく君が嘆きのこがるればあらぬ<sup>31</sup> 思ひも燃えまさりけり

かく言ひて、心は通ひけれど、親にもつつみ、人にもさはりければ、心とけて久しくも語らはずあり。されど、いかでか入りけむ、この妹の寝たる所へ入りにけり。いと忍びて、また夜深く出でにけり。たまさかに入りは入りたりけれ

ど<sup>32</sup>、逢ふことは難かりけり。常に向かひにければ<sup>33</sup>、夜は逢はず、なかなか心はそらにて、「いかにせん」と思ひ嘆きて、

〔簗〕うちとけぬものゆゑ夢を見て<sup>34</sup> 飽かぬもの思ふ頃にもあるかな返し、

〔女〕みを寝ずは夢にも見えじを逢ふことの嘆く嘆くも明かし果てじをかく夢のごとある人は、妊みにけり。書読む心地もなし。「例の障りせず」など、うたてある気色を見て<sup>35</sup>、この兄も、「いとほし」と見て<sup>36</sup>、人々<sup>37</sup>春のことにやありけむ、ものも食はで、花柑子・橘をなむ願ひける、知らぬ程は、親求めて食はす、兄、大学の主するに、「皆取らまほし」と思ひけれど、二三ばかり、畳紙に入れて取らす。

〔簗〕あだに散る花橘の匂ひには緑の衣の香こそまさらめこれをきこしめすなればなむ。返事に、「御懷にありければなむ、

〔女〕渡りとや<sup>38</sup> 花橘を嗅ぎつれば緑の香さへうつらざりけり」

## 五 引き裂かれる二人

かかゝることを、母おとど聞き給ひて、ものもの給はで、うかがひ給ひて、向かひ給ひたりけるを、手を取りて、引きもていき、部屋に籠めてけり。これを、父主聞き給ひて、のどかなりける人なりければ、「男もかしこき者にて、女幼き者にあらず。さしたるやうあらむ。なほ許し給ひて、の給へ」とありければ、「おのが身を思ふとて、の給ふに」とて、いよいよ鍵の穴に土塗りて、「大学の主をば、家の中にな入れそ」とて、追いければ、曹司に籠りあて、泣きけり。妹の籠りたる所に行きて見れば、壁の穴のいささかありけるを、くじりて、「ここもとに寄り給へ」と呼び寄せて、物語りして、泣きをりて、出でなまほしく思へども、まだいと若うて、ねたりたべき<sup>39</sup> 人もなく、わびければ、ともかくもえせで、いといみじく思ひて、語らひをる程に夜明けぬべし。男、

〔簗〕数ならばかからましやは世の中にいと悲しきは賤の緒だまきかへ返し、

〔女〕いささめにつけし思ひの煙こそ身を浮雲となりて果てけれと言ひて、泣きあへりけり。

## 六 女の死

夜明けにければ、曹司に帰りて、この女食ひつべきやうに<sup>40</sup>、物をかへて、持ていかんとするに、心まどひして<sup>41</sup>、足もえ踏み立てず。もののおほえざりければ、むつまじう使ふ雑色を使ひて、「ただいま心地あしうて、え参り来ず。その程これすき給へ。ためらひて参らむ」。女、穴のもとにて待つに、かく言ひたれば、

〔女〕誰がためと思ふ命のあらばこそ消ぬべき身をも惜しみとどめめ



取り入れず。歸りて、「かくなん」と言ひければ、かしこうして、またまた行きて見れば、三四日物も食はで、ものを思ひければ、いとくちをしう息もせず。「いかがおはします」と言ひければ、

〔女〕消え果てて身こそはるかに<sup>42</sup>なり果てめ夢の魂まで<sup>43</sup>君に逢ひ添へ返し、

〔簀〕魂は身をもかすめずほのかにて君まじりなばなににかはせむとて、よろづの事を言ひて泣けど、答へせずなりにければ、「死ぬ」とて泣き騒げば、声を聞きて、ときあけて見れば、絶え入る気色を見て、まどひ出でて<sup>44</sup>、ほかの家<sup>いへ</sup>に往にけり。親出でて後に、出で、率て入りて、見れば、死にて臥せり。泣き呼べど<sup>45</sup>、かひなし。

## 七 女の靈魂と簀のその後

その日の夜さり<sup>46</sup>、火をほのかにかきあげて、泣き臥せり。あの方こそめきけり。火を消ちて見れば、添ひ臥す心地しけり。死にし妹の声にて、よろづの悲しきことを言ひて、泣く声も言ふことも、ただそれなれば、もろともに語らひて、泣く泣くさぐれば、手に<sup>て</sup>触らず、手に<sup>て</sup>だにあたらず。懷にかき入れて、我身のならんやうも<sup>47</sup>、臥さまほしきことかぎりなし。

〔簀〕泣き流す涙の上にありしにもさらぬあはぬ<sup>48</sup>浮かべる

女、返し、

〔女〕常に寄るしばしばかりは泡なればつひに溶けなむことぞ悲しきと言ふ程に、夜明けにければ、泣く<sup>49</sup>。

親は捨てて往にければ、とかくをさむることは、ただこの兄ぞしける。人はみな捨てて行きにければ、兄<sup>50</sup>、従者<sup>せうと</sup>三四人、学生<sup>がくせい</sup>一人して、この女を死にける親を、いとよく払ひて、花・香焚きて、遠き所に火をともしてゐたれば、この魂<sup>たましひ</sup><sup>51</sup>、夜な夜な来て語らひける。三七日、いとあざやかなり。七日<sup>52</sup>、時々見えけり。この男、涙尽きせず泣く。その涙を硯の水にて、法花經を書きて、比叡<sup>ひえ</sup><sup>53</sup>の七日のわざしけり。その人、七日はなし果てても、ほのめくこと絶えざりけり。三年過ぎては、夢にも確かには見えざりけり。なほ悲しかりければ、初めのごとしてなむまかせたりける。妻にも寄らで、一人なむありける。

## 第二部

### 一 篁と右大臣の娘の結婚

時の右大臣の娘賜へと、文をおもしろく作りて、内に参り給ふとて、御車より  
通<sup>とほ</sup>り給ふことに<sup>54</sup>、ついふるまひて、奉<sup>たてまつ</sup>れ侍るに<sup>55</sup>、取りて見給ひ、「承<sup>うけたまは</sup>りぬ。  
今、家にまかりて、御返<sup>ごへん</sup>り聞えん」との給ふ。大学に入り<sup>だいがく</sup>にけり。殿に帰<sup>かへ</sup>り給ひ  
て<sup>56</sup>、御娘三人おはしけり、大君に、「しかじかのことなむある。いかに」と聞  
え給へば、怨<sup>あ</sup>じて、泣<sup>な</sup>きて入<sup>い</sup>り給ひぬ。中の君、同<sup>おな</sup>じ事聞え給ふ。三の君に聞  
え給ふ。「ともかうも、仰<sup>おほ</sup>せ言<sup>こと</sup>にこそ従<sup>したが</sup>はめ」との給へば、いと清<sup>きよ</sup>げに寝殿造り  
て、よき日<sup>ひ</sup>して呼<sup>よ</sup>び給ふ。御消息<sup>ごせうそく</sup><sup>57</sup> ありければ、いと悲<sup>かな</sup>しう、橡<sup>つるばみ</sup>の衣<sup>きぬ</sup>の<sup>58</sup> やれ  
困<sup>こう</sup>じたる着<sup>き</sup>て、てりゐたる<sup>59</sup> 沓履<sup>くつは</sup>きて、ふくめる文<sup>ふみ</sup>のなく<sup>60</sup> 取りて、来<sup>と</sup>にけり。  
帳<sup>たう</sup>の内に入<sup>うち</sup>りて、まづこの文卷<sup>ふみまき</sup>を賜<sup>たま</sup>へれば<sup>61</sup>、取り給はねば、篁<sup>たかむら</sup> 差<sup>さ</sup>して行<sup>い</sup>けば、  
この君、皮<sup>かは</sup>の帯<sup>おび</sup>を取りて、引<sup>ひ</sup>き止<sup>と</sup>め給へば、止<sup>と</sup>まり給ひにけり。これを垣<sup>かい</sup>間<sup>ま</sup>見て、  
父<sup>ちち</sup>大臣<sup>おと</sup>、見<sup>み</sup>給ひて、「いとかしこうしつづ<sup>59</sup>」喜<sup>よろこ</sup>び給ふ。「出<sup>い</sup>でて往<sup>い</sup>なまし。いかに  
人<sup>ひと</sup>聞<sup>き</sup>きやさしからまし。いとかしこきことなり」と喜<sup>よろこ</sup>び給ふに、一日<sup>いちにち</sup>の夜<sup>よ</sup><sup>62</sup>、い  
といかめしうして<sup>63</sup> 待<sup>まち</sup>ち給ふ。ただ童<sup>わらは</sup>一人ぞ具<sup>く</sup>し給ひける。

### 二 女の靈魂とそれを知った妻

さて、この頃<sup>ころ</sup>、妹<sup>いもうと</sup>のある屋<sup>や</sup><sup>64</sup> に行<sup>い</sup>きたりければ、いと悲<sup>かな</sup>しかりければ、寝<sup>ね</sup>にけり。  
妹<sup>いもうと</sup>、

〔女〕見<sup>み</sup>し人<sup>ひと</sup>にそれかあらぬかおぼつかなもの忘れ<sup>わす</sup>れせじと思<sup>おも</sup>ひしものを  
と言<sup>い</sup>ひければ、かの殿<sup>どの</sup>にもいかでぞ泣<sup>な</sup>きをりける。久<sup>ひさ</sup>しう来<sup>き</sup>ねば、大殿<sup>だいだん</sup><sup>65</sup>、「あやし」  
とおほしけり。七日<sup>しちにち</sup>ばかりありて、来<sup>き</sup>たり。「なか見え給はざりける」との給へば、  
素<sup>す</sup>直<sup>な</sup>なりける人<sup>ひと</sup>にて、こと隠<sup>かく</sup>して言<sup>い</sup>ひければ、妻<sup>め</sup>、「いとあるべかしき事<sup>こと</sup>にて、  
あはれの事<sup>こと</sup>や。我がためにも、さらずはおはせめ、わいてもこそは、むかし人<sup>ひと</sup>は  
心<sup>こころ</sup>も容<sup>かた</sup>姿<sup>たち</sup>も、さものし侍<sup>むす</sup>りければ<sup>66</sup> こそ、年<sup>とし</sup>を経て、え忘れがたくし給ふらめ。  
さる人<sup>ひと</sup>を見<sup>み</sup>侍<sup>むす</sup>り<sup>67</sup> けんに、言<sup>い</sup>ひ知<sup>し</sup>らで見え奉<sup>たてまつ</sup>るよ。後<sup>のち</sup>の世<sup>よ</sup>いかならむ。

〔三君〕飽<sup>あ</sup>かずして過<sup>す</sup>ぎける人<sup>ひと</sup>の魂<sup>たましひ</sup>に生<sup>い</sup>ける心<sup>こころ</sup>を見<sup>み</sup>せ侍<sup>むす</sup>る<sup>68</sup> らむ  
あな、はづかし」との給ふに、男<sup>おとこ</sup>、「なにか、それはおほしめす。かくては、果<sup>は</sup>  
てはえ知<sup>し</sup>ろしめさじ。御<sup>ご</sup>魂<sup>たましひ</sup>のあるやうも見るべく、試<sup>し</sup>みにさへなり給はぬ」とて、

〔篁〕別<sup>わか</sup>れなばをのがたまたま<sup>69</sup> なりぬともおどろかさねばあらじと思<sup>おも</sup>ふ  
出<sup>い</sup>でてまかりしを引<sup>ひ</sup>き止<sup>と</sup>めて、今<sup>けふ</sup>日までさぶらはせ給ふ。うるさしかし」と言<sup>い</sup>ひ  
ける。

### 三 篁という人

この男<sup>おとこ</sup>は、若<sup>わか</sup>き間<sup>あひだ</sup>は、いと懇<sup>ねむこ</sup>ろに見<sup>み</sup>えて<sup>70</sup>、他<sup>ほか</sup>に夜<sup>よ</sup>離<sup>が</sup>れなどもしけり。なり出<sup>い</sup>



でて、宰相<sup>さいさう</sup>よりも上<sup>かみ</sup>になりにけり。これなむ名<sup>な</sup>に立つ<sup>た</sup>臺<sup>たかむら</sup>なりける。才覚<sup>さいかく</sup>はさら  
 にもいはず、歌作<sup>うたつく</sup>る<sup>71</sup>ことも得<sup>え</sup>たり顔<sup>かほ</sup>に、この国<sup>くに</sup>の人にはたへずぞ<sup>72</sup>ありける。  
 このこむ<sup>傍記ら</sup>このこて<sup>73</sup>、かく歌詠<sup>うたよ</sup>まぬはなかりけり。聞き給<sup>きたま</sup>はざりし姉<sup>あね</sup>二所<sup>ふた</sup>は、  
 いとわろき人<sup>め</sup>の妻<sup>め</sup>にて、この御徳<sup>とく</sup>を見給<sup>みたま</sup>ひける。いとよくなり出<sup>い</sup>でければ、この  
 三<sup>さん</sup>の君<sup>きみ</sup>を、また二<sup>ふた</sup>なくもてかしづき奉<sup>たてまつ</sup>る。今<sup>いま</sup>の人<sup>ひと</sup>、まさに大学<sup>がく</sup>の衆<sup>しゆ</sup>を、婿<sup>むこ</sup>に取<sup>と</sup>  
 大臣<sup>だいじん</sup>もあらむや。ただ、心高<sup>たか</sup>き才<sup>さい</sup><sup>74</sup>劣<sup>を</sup>り給<sup>たま</sup>ふなるべし。またあらじかし、かや  
 うに思<sup>おも</sup>ひて、文作<sup>ふみつく</sup>る人<sup>ひと</sup>は。

< 註 >

- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| 1 彰考館本「さえ」         | 26 彰考館本「おもひて」        |
| 2 彰考館本「むつまじからん」    | 27 彰考館本「なかうと」        |
| 3 彰考館本「て」 書陵部本「ちり」 | 28 彰考館本「ゆるされたまはては」   |
| 4 彰考館本・書陵部本「かくひち」  | 29 彰考館本「しゝたれと」       |
| 5 彰考館本「一首」         | 30 彰考館本「おもひくさなや」     |
| 6 彰考館本「さき」         | 31 彰考館本「やらぬ」         |
| 7 彰考館本「おとこきて」      | 32 彰考館本「はいゝり／＼たりけれと」 |
| 8 彰考館本・書陵部本「かくひち」  | 33 彰考館本「むかひみたりければ」   |
| 9 彰考館本「かやう初のふみ」    | 34 彰考館本「見てさめて」       |
| 10 彰考館本「ひとしれす」     | 35 彰考館本「みて人／＼いふ」     |
| 11 彰考館本「おなしいう」     | 36 書陵部本「をしみて」        |
| 12 彰考館本「ませ」        | 37 彰考館本は「人／＼」を欠く     |
| 13 彰考館本「いとおかしかりて」  | 38 彰考館本「にたりとや」       |
| 14 彰考館本「はかり」       | 39 彰考館本「いたりたへき」      |
| 15 彰考館本「かしは車」      | 40 彰考館本「くいつきやに」      |
| 16 彰考館本は「載せ奉りて」を欠く | 41 彰考館本「こゝろまとひて」     |
| 17 彰考館本「屏」         | 42 彰考館本「身こそはいに」      |
| 18 彰考館本「身」         | 43 彰考館本「夢のたましゐ」      |
| 19 彰考館本「くれぬれは」     | 44 彰考館本「まとゐて」        |
| 20 彰考館本「あたきねすゑぬ」   | 45 彰考館本「なきまとへと」      |
| 21 彰考館本「ありにし」      | 46 彰考館本「ようさり」        |
| 22 彰考館本「ところ」       | 47 彰考館本「ならんやうもしす」    |
| 23 彰考館本「ゐ給へりしか」    | 48 彰考館本「あはの山」        |
| 24 彰考館本「しは／＼」      | 49 彰考館本「夜のあけにけれはなし」  |
| 25 彰考館本「うちいていけ」    | 50 彰考館本「たゝこのせうと」     |

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| 51 彰考館本「たましみなん」   | 63 彰考館本「いかめしうて」     |
| 52 彰考館本「四七日は」     | 64 彰考館本「ありしやに」      |
| 53 彰考館本「ひえの三味堂にて」 | 65 彰考館本「大臣殿」        |
| 54 彰考館本「とりたまふとに」  | 66 彰考館本「さものし給ければ」   |
| 55 彰考館本「たてまつれたふに」 | 67 彰考館本「たまひ」        |
| 56 彰考館本「かへりて」     | 68 彰考館本「たまふ」        |
| 57 彰考館本「せうそく」     | 69 彰考館本「さま／＼」       |
| 58 彰考館本は「きぬの」を欠く  | 70 彰考館本「あはて」        |
| 59 彰考館本「しりゐたる」    | 71 彰考館本「山たつる」       |
| 60 彰考館本「ち、」       | 72 彰考館本「たらすそ」       |
| 61 彰考館本「たてまつれは」   | 73 彰考館本「このこんまうの、こて」 |
| 62 彰考館本「三日の夜」     | 74 彰考館本「こゝろかたちさい」   |